

第7回： 外因性内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）問題の現状と課題

開催日： 1999年1月18日 / 会場： 「シビックホール」

開催趣旨： 近年、PCB、ダイオキシン類、農薬、プラスチックの原料等の化学物質に、人や野生動物の内分泌機能に異常を引き起こす恐れのあることが大きな社会問題となっている。そこで、この分野の第一人者の方々に、いわゆる環境ホルモン問題についてその現状と今後の課題、環境中での検出系等についてわかりやすく解説していただくセミナーを企画しました。

講演タイトル（講師／所属（当時））：

○ 環境ホルモンのバイオアッセイを用いた検出方法（西原力／阪大院・薬）

環境ホルモンは、1996年春に出版された *Our Stolen Future* がきっかけとなり、注目すべき環境汚染問題となっている。開発した酵母 Two-Hybrid 試験を含むインビトロ試験を中心にスクリーニング試験を概説する。

○ 環境ホルモン物質による野生生物の汚染と影響（田辺信介／愛媛大・農）

途上国における化学物質の最大市場は現在アジアにあるが、法的整備が遅れているため様々な環境汚染や生態系への影響が懸念される。アジア・オセアニアを中心に愛媛大学が調査した有機塩素化合物による環境と生物汚染の現状を紹介する。

○ 環境ホルモンなど化学物質による日本の環境汚染状況と今後の課題（門上希和夫／北九州市環科研）

化学物質は、人類の生存にとって欠かせない反面、環境汚染を引き起こし、人間の健康や自然生態系に悪影響を及ぼしている。化学物質による環境汚染の現況と濃度を評価する上での問題点を示し、今後どのように化学物質に対応していくべきかを述べる。

○ 環境庁の環境ホルモン戦略計画（椎葉茂樹／環境庁）

現時点における外因性内分泌攪乱化学物質問題についての環境庁の基本的な考え方や及びそれに基づき今後進めていくべき具体的な対応方針を取りまとめると共に、方針を定めるに当たって判断根拠とした科学的知見の概要を述べる。

○ 環境ホルモン物質による人への影響（香山不二雄／自治医大）

現状、内分泌攪乱化学物質の人への健康影響は不明であり、内分泌攪乱化学物質の人の健康および生態系へのリスク評価をすることは急務である。哺乳類での研究例、スクリーニング方法、および人畜由来のホルモン製剤の現状について概説した。